



赤花

4

2020

りっかはいくかい

山田六甲

蝶の羽

紳

蝶の羽たたためば消ゆる町の音
若草の山の色して春コート
薬師寺の二塔三尊百千鳥

薬師寺

右脇は月光菩薩春いまだ
千手佛つかはぬ手あり春の闇
天平の仏女身か春ともし
つちふるや玄装三蔵大男
暖かや南柯の人と飛火野と
青丹よし奈良の都の桃の花
大鯉の冬去にしかと浮見堂
あめんぼう水の神輿に浮かれけり
春宵や奈良の町家のお化け松

浮見堂

「松籟」で句会

南柯の夢邯鄲の夢春の夢
春の夢から目が醒めず迎酒
残り鴨尾をたて唐土はるかにす
揚雲雀平城京は広かりき
大極殿の鴟尾衰へず名残梅
実篤の色紙に椿あかりかな
女中部屋隣る書齋や春障子
この庭に多喜二下りしや雪柳
足入れて猫のおどろく春炬燵
春月の松撫でながら上がりけり
春雨や命といふ字傘を着て

平城京跡

志賀直哉旧居

笹村 政子

女正月

雪嶺抄

万両や曲り廊下に灯の入りて
返り花西の櫓に日の差せり
寒牡丹しやがめば仏拜むかに
不確かな影に追はるる冬の蝶
橋くぐる水やはらかし春隣
高千穂の闇ひらけ来る初明り
飾売こたびは嫁を伴うて
亡き母のこゑとも妹の謡初
縄跳びの影を掬うてゐたりけり
読み止しの犯人はだれ女正月

志方 章子

切干

蟋蟀抄

ぶかぶかと口で息する勝相撲
切干に筵の匂ひ交じりをり
枯葉踏む音軽やかに図書館へ
小春日やぼんやり活字追うてをり
鳥の食み残し幾粒実南天
冷ましては嬰に一匙葛湯かな
大服を飲み干す顔の厳めしき
極月といふばかりなる何もせず
初暦はや書き込みのそこここに
追ひ込みのお節料理や大晦日

はまなす抄 からくれなゐ 升田ヤス子

追焚きの湯やゆらゆらと柚子逃げて
煤逃げや口コミで行く映画館
除夜篝ときに咆哮したりけり
寒椿鐘の打たれし時に散る
初御堂母の忌日の書き出さる
初刷のからくれなゐの六花かな
初鏡よべアルバムに浸りしに
ぐりとぐらの切手貼りたる初便
病む姉に薺打つ音高うせり
餌台に分かちてゐたる小豆粥

山稜抄 ひよどり 藤生不二男

梟のふはりと風の生れにけり
水鳥の遠鳴く湖の広さかな
おほかたは風となりたる枯芒
冬雲雀空の高みを知らぬまま
ひよどりのやたら鳴きをり藪柑子
裏木戸の胸の高さに日短か
冬耕の影に入りたる遠田かな
担ぐほどもなき熊手を買ひにけり
数へ日の縁側に日のまはりけり
庇より雪のしづくや弓始

傍らに妻の気色や煤払
冬麗や瀬戸の潮目の顕きこと
人気なき岬や猫の日向ぼこ
好きな句をうそぶいてみる冬の月
夕茜恋しとゆけり枯野道
喘息の子の背をさする聖夜かな
この谷に生き果てぬべし初茜
投扇の花散里へ落ちにけり

行き先はその日の気分神の旅
奥山の銀の馬車道夕時雨
神在の出雲へ傘を差しゆけり
一筋の流れ見えたる枯蓮田
研ぎたてを試す大根の切れ端で
笹鳴きを聞かむ歩幅を縮ませて
熱風邪に覚めて昼とも夜中とも
書初めの反故より墨の香りけり

鼻の管泡光らせて冬の宵
冬うらら受けてますますに流る川
辛くなき麻婆豆腐よ冬の昼
退院のきまらぬままの冬の昼
久しぶり家族と話す冬の昼
点滴の雫がリズム刻む冬
大窓に夜景の映える冬の部屋
退院の期待ふくらむ冬の朝

一行は丁寧に書く初日記
正月や我が背を超える孫五人
お開きは一族揃ひ初写真
オープンカフェ炬燵の二つありにけり
蒲の絮歪になりて枯残る
冬雲に一羽の鳶の消えにけり
発つ前のざわめいてゐる鴨の群
ゆりかもめ旋回しては水面掻く

谷口 一献

田尻 勝子

百八つ御恩御恩と去年今年
初晴や五重の塔に濃き闇夜
猿曳の動きに釣られ回さるる
賽銭をフードで受くる残り福
年賀客お辞儀してはて誰かしら
朝酒は軽めに流し初句会
酒旨き店見つけたる恵方かな
猿酒^{ましだいけ}ひさぐ丹波路初霞

右腕に残る齒形や春愁ひ
冬雲の連山に影写しをり
熊本弁期せずして出づ春隣
湧水の玉に景色の廻りをり
船笛の一声鋭し寒の入
大世界地凶欲し白髪如初春に
春の来る終末時計の残100秒
アメリカ楓の白骨にあり寒の丘

夢風撰巻頭

一筋の流れ見えたる枯蓮田

住田千代子

行き先はその日の気分神の旅
奥山の銀の馬車道夕時雨
神在の出雲へ傘を差しゆけり
一筋の流れ見えたる枯蓮田
研ぎたてを試す大根の切れ端で
笹鳴きを聞かむ歩幅を縮ませて
熱風邪に覚めて昼とも夜中とも
書初めの反故より墨の香りけり

ひとすぢのながれみえたるかはすだ すみだちよ」

水を満々とたたえていた蓮田も秋には蓮根を掘り出されそのあと水を抜かれてしまう。水があるときには感じなかつたが冬になって水が抜かれてしまうと涸れた田は、いよいよ寒く蕭条としてゴーストタウンの様相を見せる。だがその田に細い流れがあるのを発見した。細いながら水の流れが生き物のように動いているのを見ると、冷たい水にさえ安堵を覚える。人を寄せ付けない冬の蓮田を淡々と読んだただの写生句のようにだが役目を終えて静かに休む蓮田にも流れがあり水の出入りがあるのだ。淡々と写生したから印象深く読者に訴える句となった。

雪樹集

平居 濤子

大内 幸子

湯けむりや父恋の子と冬の旅
手を取りて母を渡せる冬の川
この山の土と化さむや風花す
旅の柚子ふんだんに入れ入浴す
忘れものしたる貌なり湯ざめの子
山茶花の散り敷く墓にそを告げん

町並の静けさ包む大初日
初景色見馴れし山河改まる
県境の尾嶺を透かして枯木立
川越えて今年も門にどんど灰
存へて日々世に疎く寒椿
スカレット彩の六花や年新た

廣畑 育子

江見 巖

初会の三線お囃子琉球舞
大橋を真正面なる初景色
門松に張子の鯛の明石浜
初電話互ひの母の話など
初買の画筆の先の柔らかさ
ストーブを知らぬ子に見す焼蜜柑

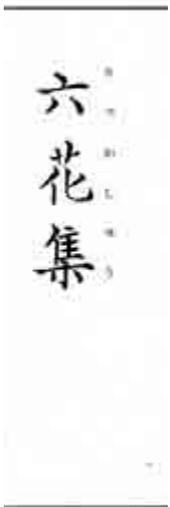
正月や厨に音の消えて行き
携帯の飛び込んでくる寝正月
平行線いつかあはむと初鏡
初暦のぞきこんだる夢の先
海底に横たはる艦淑気満つ
大とんどじつと見にくる消防車

延川 笙子

延川 五十昭

釣り糸を垂れる親子の節分会
水槽の水日に当る節分会
節分会水仙の花賑はへり
赤鬼をひつぱたく夢節分会
雨あとの木々の息吹きや春立ちぬ
普請場のシートをめくる春一番

青竹の囲はれてゐる追儼式
節分やまるまるとせる鯛買ふ
棟梁のけふは追儼の鬼踊り
節分やロールケーキの鬼の顔
ペンキ屋の赤鬼役や節分会
柵のさせる格子や猫の声



菊谷 潔

石川 憲二

日めくりのほかあらたまるものは無し
正月も常と変らぬ鴉かな
落葉まで薄化粧して今朝の霜
目覚めては震ふる音冬ごもり
かぶら二つ洗ひて指の痛さかな

新妻の郷の会津の雑煮椀
止め撥ねも今年の決意筆始
舞獅子に頭齧られまた泣けり
初春や稲穂かんざし艶やかに
老妻のあら煮しみじみ骨正月
帰省子の橋渡り行く小晦日
頬笑みて見送る妻の寒の雨
残されし者に但馬の寒の雨
水仙や葉のみ育ちて花を待つ
冬ぬくし一枚脱ぎて歩きけり

磯野青之里



善野 行

投扇の花散里へ落ちにけり

「投扇興」の点数は扇の落ちる形によつて源氏物語の題をつけてある。「花散里（はなぢるさと）」は、桐壺院の生前の時代を静かに振り返る巻で、穏やかな女性につよく惹かれる。さんざん女性遍歴を重ねてくると、ときにはそういう境涯ひと時の安住のよろしさを……と光源氏も考える。その「源氏」が最も信頼を寄せた人で、聖母のような女性のところへ扇が飛んでいったのもあながち偶然ではないような気がするのである。私もできれば花散る里へ墜ちてみたい。夢風撰候補。

住田千代子

行き先はその日の気分神の旅

神様は十月に出雲へ行かなければいけないが、この神様はどうもその日の気分で遊ぶ先をお決めになる。このよくな気ままな神様は古事記にも見当たらない。予定を決めてしまう人は、頭が固まってしまい却って閉じこもっておしまいになる。全国どこにでも気ままにかれる神様は楽しいに違いない。そういう神様も美しい女神と行動をとともにできるなら最高にうれしい旅。夢風撰候補。

山口 誠

鼻の管泡光らせて冬の宵

尾籠な場面であるが、入院して鼻から管を入れている光景。風邪かなにかで重篤になり治療されている場面であろう。外はしんと冷える夕方である。管の泡が見えるのだから、本人ではなく家族なのであるか。こういう状況も句に詠んで詩にしておくのも記録である。石田波郷さんも「しびん」などの材料を詩に昇華している。この句ももう一工夫すれば詩になると思われる。例えば「秋の暮渡（しびん）泉のこ糸をなす 波郷」など。

永田万年青

一行ほ丁寧を書く初日記

正月らしく万年青らしい初日記である。初日記は絶対に書く、しかし、手早く二三行書いて、そのあとは正月を気ままに過ごすのだ。以前は酒をたしなんだが今は健康上酒を飲まない。という具合だ。初日記らしい書き方。昔は日記をさつとつけてはるみちゃんのところへ行ってビール一本とカラオケで自慢ののどを披露していたが、今は孫と嬉しいひと時に幸せを見出している。

谷口 一献

百八つ御恩御恩と去年今年

「御恩御恩」とは鐘の音の聴きなしであるが、一年の境目に聞くとゴーンが御恩に聞こえるのだろう。「今年も楽しいお酒が飲めて健康で感謝します」という一献らしい聞こえ方である。除夜の鐘は煩惱の数、百八回打つが近頃は音がうるさいと苦情がでるそうで、そういう人たちは風情も何もあつたものではない。しかし作者のように御恩御恩ととらえれば、騒音などということは考えられない無粋な人間である。きつとお寺に遺恨があるのだろうか。ゴーンと聞くと嫌な思いをするのは土産の社長と社員。